

学校関係者評価

1. 学校関係者評価の実施

文部科学省策定の「専修学校における学校評価ガイドライン」に沿って「2019年度自己点検・自己評価」、「2019年度3年生卒業時アンケート」「既卒生および就職施設アンケート」を実施。その評価結果を基に学校関係者評価委員会を開催した。

2. 学校関係者評価委員会開催について

日 時：令和2年8月24日（月）午後1時30分～3時

場 所：大会議室

出席者：教育に関する有識者（本校外部講師）1名

他の看護専門学校関係者 1名

関連施設関係者（卒業生）1名

設置主体関係者 1名（欠席）

本校出席者：学校長（欠席）、副学校長、3年課程学科長、事務部長

3. 議 題

(1) 開式

(2) あいさつ

(3) 評価委員紹介

(4) 自己点検・自己評価等の説明

(5) 意見交換

(6) その他（コロナ禍における今後の感染対策とカリキュラムへの取り組み）

4. 学校より自己点検・自己評価Ⅰ～Ⅸのカテゴリーについて、自己評価結果の説明を行った。

（2019年度自己点検・自己評価結果要約）

各カテゴリーより学校運営において、4点の課題が抽出された。

以下4項目について意見交換を行った。

<課題となる項目>

(1) 受験生確保について

(2) 卒業率の向上（学習力の向上）

(3) 国家試験合格率の向上

(4) 卒後実践力の担保（看護を実践する力の向上）

5. 意見交換

(1) 受験生の確保について

<委員からの質問>

近年の動向をもとに今後の入試について検討していることはあるか。

<学校からの回答>

試験科目について点数比較ができるように科目構成を変更するとともに、高校評定を 3.5 から 3.3 へ変更することとした。

<委員からの意見>

- ・看護専門学校における受験生確保の第 1 は国家試験合格率、就職率を上げること、第 2 には学生への学校生活のサービスの提供である。少子化、大学全入の中、特徴あるシステムテックなものを構築し、学校の質の向上が対策と考える。
- ・教育の質を担保しながら国家試験合格率を上げることが課題である。
ただし、国家試験合格率を上げたとしても中身が伴っていないければ、最終的には学校の評価も下がるため、結果的に受験生の確保にはつながらない。
- ・選ばれる学校になるには学生との関わりを大切にし、学生生活の満足度を得る事が大切と考える

(2) 卒業率の向上

<委員からの質問>

再履修者は増えているのはなぜか。どのような状況なのか。

<学校からの回答>

大学を目指す学生の増加に伴い新卒者の受験生が減少、雇用が安定してきたことから社会人の受験生も減少しているため、定員を満たすためには基礎学力の低い学生も入学している。
看護師になるとのモチベーションもばらつきがあり、クラス全体で目標達成に向けて取り組む力が弱い。お互い学びあうことが困難となっている。

<委員からの意見>

- ・ICT 化の活用。学生が主体的に取り組める仕掛けが必要。
学習力の向上には学生の自主性をひきだせる教育システム作りが必要であり、過去からの授業方針を変えることも視野にいれる。
- ・現在、大学ではオンライン授業が主であるが、その中でも自発的に取り組める双方向での授業展開をしている。例えば、テストを行う際に自己評価を記入させることで自発性が生まれ、結果として授業中に質問が多くなったなどの状況もあるため、専門学校においても検討されてはどうか。
- ・この学校はアットホームで、教員が学生の声に耳を傾け親身になってくれるという良さが強みである。それを基盤に国試合格率、卒業率の向上を図っていただきたい。

(3) 国家試験合格率の向上

<委員からの質問>

国家試験対策として模擬試験など実施しているか。

<学校からの回答>

1 年次より計画的に国家試験対策講座および模擬試験を実施している。
国試模試、対策講義は以前と比べて回数や時間を増やしているが、学生のモチベーションアップに繋がっていない。

<委員からの意見>

- ・個人的に塾と合わせて学習する学生もいるが、学校の対策授業だけで合格者を輩出できていることはカリキュラムが適正であると評価される。
- ・学生同士で勉強の場を持つなど一丸となって、主体的に取り組めるような対策を図っていくことが望まれる。

(4) 卒後実践力の担保（看護を实践する力の向上）

<学校の意見>

卒後実践力のアンケート結果から、実践力の到達度の結果が低かった。看護専門学校の使命である看護を实践する力の育成ができていないことは今後の大きな課題と捉えている。

1年次から技術習得については、授業時間外も教員が指導に入っている。また、プレテストでしっかりとタスクトレーニングを行い、本試験で学生が自身の力を発揮できるようかかわっているが、試験に合格するための技術習得との意識もうかがえるため、早期から動機づけしていくことが不可欠と考える。また、在学中、臨地実習での経験値が少ないこともあり、卒業前演習の強化に努める必要がある。

6. 委員からのまとめ

「学生との関わり」といったこれまで大切にされてきた人間関係の構築を継続し、自主性を引き出すカリキュラム作りを心掛け、学校の質の向上を目指してもらいたい。

学生の日々の学習習慣の弱さを挙げられていたが、国家試験では塾の必要がなく学校が行うカリキュラムだけで国家試験合格者を輩出していることは、カリキュラムそのものは適正であると捉える。

7. 今後に向けて

今回、貴重な意見や質問を数多くいただき、学校関係者評価委員会の意見は大いに有益となった。

学生の語彙力、ベースになる知識の乏しさはどの専門学校も抱える課題である。今後のカリキュラム改正に向けて教育をする側が変わらなければいけない時期にきていることを実感している。

「気付きを育む」「ワクワクするカリキュラム作り」を目指し、本校の質向上を図っていく努力を推し進めていきたい。